# 「第三六章　資本主義以前」

## 「第三六章」の抜粋

### 高利資本の存立条件

P766

「高利資本の存在のためには、生産物の少なくとも一部分が商品に転化しており商品取引と同時に貨幣がそのさまざまな機能において発展しているということのほかには、なにも必要ではない。」

P772

「支払手段としての貨幣の機能こそは、利子を、したがってまた貨幣資本を発展させるものである。……利子によって彼はこの蓄蔵貨幣をそのまま資本に転化させる。」

### 高利資本の存在形態

P767-768

「資本主義的生産様式以前の時代に高利資本がとる特徴的な存在形態には、二つのものがある。……第一には、浪費をこととする貴人、おもに土地所有者への貨幣貸付による高利である。第二には、自分自身の労働条件をもっている小生産者への貨幣貸付による高利である。……およそ資本主義以前の状態にあっては、それが小さな独立な個別生産者たちの存在を許すかぎりでは、農民階級がその大多数をなさざるをえない……

　利子生み資本の特徴的な形態としての高利資本は、小生産の優勢に、すなわち自営農民や小手工業親方の優勢に、対応する。……貧しい小生産者から搾取する高利が、富裕な大土地所有者から搾取する高利と手をつないで行くのである。」

### 高利資本の社会的影響

P769

「高利は、一方では、古代的および封建的富にたいしても、古代的および封建的所有にたいしても、転覆的破壊的に作用する。他方では、それは、小農民的および小市民的生産を、要するに生産者がまだ自分の生産手段の所有者として現われているようなすべての形態を、転覆し破滅させる。」

P770

「高利は、生産手段は分散されているのに貨幣財産を集中する。高利は生産様式を変化させないで寄生虫としてそれに吸いつき、それを困窮させる。高利は生産様式を搾取し、それを衰弱させ、そして、再生産にますますみじめな条件のもとで行なわれることを強制する。それだからこそ、高利にたいする民衆の憎悪は古代世界で最も激しかったのである。……

　資本主義以前のすべての生産様式のもとで高利が革命的に作用するのは、ただ、高利が所有形態を破壊し分解するからである。」

### 信用制度と高利資本と企業家支援の根拠

P774

「信用制度の発展は高利にたいする反作用として実現される。……このことが意味しているのは、利子生み資本が資本主義的生産様式の諸条件と諸要求とに従属するということ以

上のなにものでもないし、またそれ以下のなにものでもないのである。
……利子生み資本は、資本主義的生産様式の意味では借入れがなされないような、またなされることができないような、諸個人や諸階級にたいしては、またはそのような事情のもとでは、高利資本の形態を保持する。」

P775

「財産もない男が産業家や商人として信用を受ける場合でさえも、それは、彼が資本家として機能し借りた資本で不払労働を取得するであろうということが信頼されて行なわれるのである。彼に信用が与えられるのは、潜勢的な資本家としての彼に与えられるのである。そして、経済学的弁護論者たちによって非常に賛嘆されるこの事情、すなわち、財産はないが精力も堅実さも能力も事業知識もある一人の男がこのようにして資本家に転化することができる――じっさいおよそ資本主義的生産様式のもとでは各人の商業価値が多かれ少なかれ正しく評価されるのだ――というこの事情は、既存の個々の資本家にたいしては絶えず多数のありがたくない新たな射幸騎士を戦場に連れ出すとはいえ、資本による支配そのものを強固にし、この支配の基礎を拡大して、それが社会の下層からの新鮮な力によって絶えず補充されることを可能にするのである。……被支配階級の最もすぐれた人物を自分のなかに取り入れる能力が支配階級にあればあるほど、その支配はますます強固でますます危険なのである。」

資本主義の発展にともなう信用制度の発展

P776

「一二世紀および一四世紀にヴェネツィアやジェノヴァでつくられた信用組合は、昔ながらの高利の支配や貨幣取引の独占から解放されようとする海上貿易とそれに基礎を置く卸売商業との要求から生まれたものである。……かの信用組合をつくった商人たちは、彼ら自身これらの国の一流人物であり、したがってまた、自分たちの政府と自分たち自身とを高利から解放すると同時にそれによってますます確実に国家を自分たちに従属させることに関心をもっていた、ということである。」

P777

「一六〇九年のアムステルダム銀行も、ハンブルグ銀行(一六一九年)も、近代の信用制度の発展のなかで一時期を画するものではない。それは純粋な預金銀行だった。……しかし、オランダでは商業や製造工業といっしょに商業信用や貨幣取引業が発展したのであって、利子生み資本は発展行程そのものによって産業資本や商業資本に従属させられていた。…
一八世紀の全体をつうじて、オランダにならって、利子生み資本を商業資本と産業資本に従属させてその逆にはならないようにするために、利子率の強制的な引下げを求める叫びが響いた――そして立法はこの趣旨で行動した。」

エンゲルスのマルクスへの優しいまなざし

P780F1-782F6

エンゲルスはマルクスがサン・シモンについて、オーエンと対比して、厳しい評価をしていることに関して、文中の「注」で、サン・シモンに対するマルクスのその後の評価を踏まえ、優しいまなざしで、訂正している。

あらためて、信用と貨幣との関係と信用制度のもつ意味

P782-783

「しかし、けっして忘れてならないのは、第一には、相変わらず貨幣――貴金属の形態での――が土台であって、この土台から信用制度は事柄の性質上けっして離脱することができないということである。第二には、信用制度は私人の手による社会的生産手段(資本や土地所有の形態での)の独占を前提するということであり、信用制度はそれ自身一方では資本主義的生産様式の内在的形態であるとともに他方ではこの生産様式をその可能なかぎりの最高最終の形態まで発展させる推進力だということである。

……この資本の貸し手もその充用者もこの資本の所有者でもなければ生産者でもないのである。このようにして信用・銀行制度は資本の私的性格を廃棄するのであり、したがって潜在的に、しかしただ潜在的にのみ、資本そのものの廃棄を含んでいるのである。銀行制度によって、資本の分配は、私的資本家や高利貸の手から、一つの特殊な業務として、社会的な機能として、取り上げられている。しかし、これによって同時に銀行と信用とは、資本主義的生産をそれ自身の制限を越えて進行させる最も強力な手段となり、また恐慌や思惑(詐欺的幻惑)の最も有効な媒介物の一つとなるのである。」

結合労働の生産様式の社会への槓杆としての信用制度

P783

「最後に、資本主義的生産様式から結合労働の生産様式への移行にさいして信用制度が強力な槓杆として役だつであろうことは、少しも疑う余地はない。とはいえ、それは、ただ、生産様式そのものの他の大きな有機的な諸変革との関連のなかで一つの要素として役だつだけである。これに反して、社会主義的な意味での信用・銀行制度の奇跡的な力についてのもろもろの幻想は、資本主義的生産様式とその諸形態の一つとしての信用制度とについての完全な無知から生まれるにである。生産手段が資本に転化しなくなれば(このことのうちには私的土地所有の廃止も含まれている)、信用そのものにはもはやなんの意味もないのであって、これはサン・シモン主義者たちでさえも見抜いていたことである。他方、資本主義的生産様式が存続するかぎり、利子生み資本はその諸形態の一つとして存続するのであって、実際にこの生産様式も信用制度の基礎をなしているのである。」

## 「第三六章　資本主義以前」の概要と現代の私たちが留意すべき点

### 「第三六章」の要約

高利資本の存立条件

高利資本の存在のためには、生産物の少なくとも一部分が商品に転化しており商品取引と同時に貨幣がそのさまざまな機能において発展しているということのほかには、なにも必要ではない。　支払手段としての貨幣の機能こそは、利子を、したがってまた貨幣資本を発展させる。利子によって蓄蔵貨幣は資本に転化される。

高利資本の存在形態

資本主義的生産様式以前の時代に高利資本がとる特徴的な存在形態は、①浪費をこととする貴人、おもに土地所有者への高利での貨幣貸付、②自分自身の労働条件をもっている小生産者への高利での貨幣貸付の二つがある。資本主義以前の状態にあっては、利子生み資本の特徴的な形態としての高利資本は、小生産の優勢に、すなわち、その大多数を占める自営農民や小手工業親方の優勢に、対応している。貧しい小生産者から搾取する高利が、富裕な大土地所有者から搾取する高利と手をつないで行くのである。

高利資本の社会的影響

高利は、古代的および封建的富にたいしても、古代的および封建的所有にたいしても、転覆的破壊的に作用する。高利は、小農民的および小市民的生産を、要するに生産者がまだ自分の生産手段の所有者として現われているようなすべての形態を、転覆し破滅させる。

高利は、生産手段は分散されているのに貨幣財産を集中する。高利は生産様式を変化させないで寄生虫としてそれに吸いつき、それを困窮させる。高利は生産様式を搾取し、それを衰弱させ、そして、再生産にますますみじめな条件のもとで行なわれることを強制する。それだからこそ、高利にたいする民衆の憎悪は古代世界で最も激しかったのである。

資本主義以前のすべての生産様式のもとで高利が革命的に作用するのは、ただ、高利が所有形態を破壊し分解するからである。

信用制度のもとでの高利資本と信用制度のもとでの企業家支援

信用制度の発展は高利にたいする反作用として実現された。このことが意味しているのは、利子生み資本が資本主義的生産様式の諸条件と諸要求とに従属するということ以上のなにものでもないし、またそれ以下のなにものでもない。

利子生み資本は、資本主義的生産様式の意味では借入れがなされないような、またなされることができないような、諸個人や諸階級にたいしては、またはそのような事情のもとでは、高利資本の形態を保持する。

「財産もない男が産業家や商人として信用を受ける場合でさえも、それは、彼が資本家として機能し借りた資本で不払労働を取得するであろうということが信頼されて行なわれるのである。彼に信用が与えられるのは、潜勢的な資本家としての彼に与えられるのである。そして、経済学的弁護論者たちによって非常に賛嘆されるこの事情、すなわち、財産はないが精力も堅実さも能力も事業知識もある一人の男がこのようにして資本家に転化することができる――じっさいおよそ資本主義的生産様式のもとでは各人の商業価値が多かれ少なかれ正しく評価されるのだ――というこの事情は、既存の個々の資本家にたいしては絶えず多数のありがたくない新たな射幸騎士を戦場に連れ出すとはいえ、資本による支配そのものを強固にし、この支配の基礎を拡大して、それが社会の下層からの新鮮な力によって絶えず補充されることを可能にするのである。……被支配階級の最もすぐれた人物を自分のなかに取り入れる能力が支配階級にあればあるほど、その支配はますます強固でますます危険なのである。」（P775）

資本主義の発展にともなう信用制度の発展

「一二世紀および一四世紀にヴェネツィアやジェノヴァでつくられた信用組合は、昔ながらの高利の支配や貨幣取引の独占から解放されようとする海上貿易とそれに基礎を置く卸売商業との要求から生まれたものである。……かの信用組合をつくった商人たちは、彼ら自身これらの国の一流人物であり、したがってまた、自分たちの政府と自分たち自身とを高利から解放すると同時にそれによってますます確実に国家を自分たちに従属させることに関心をもっていた、ということである。」（P776）

「一六〇九年のアムステルダム銀行も、ハンブルグ銀行（一六一九年）も、近代の信用制度の発展のなかで一時期を画するものではない。それは純粋な預金銀行だった。……しかし、オランダでは商業や製造工業といっしょに商業信用や貨幣取引業が発展したのであって、利子生み資本は発展行程そのものによって産業資本や商業資本に従属させられていた。…

一八世紀の全体をつうじて、オランダにならって、利子生み資本を商業資本と産業資本に従属させてその逆にはならないようにするために、利子率の強制的な引下げを求める叫びが響いた――そして立法はこの趣旨で行動した。」（P777）

あらためて、信用と貨幣との関係と信用制度のもつ意味について

「しかし、けっして忘れてならないのは、第一には、相変わらず貨幣――貴金属の形態での――が土台であって、この土台から信用制度は事柄の性質上けっして離脱することができないということである。第二には、信用制度は私人の手による社会的生産手段（資本や土地所有の形態での）の独占を前提するということであり、信用制度はそれ自身一方では資本主義的生産様式の内在的形態であるとともに他方ではこの生産様式をその可能なかぎりの最高最終の形態まで発展させる推進力だということである。

……この資本の貸し手もその充用者もこの資本の所有者でもなければ生産者でもないのである。このようにして信用・銀行制度は資本の私的性格を廃棄するのであり、したがって潜在的に、しかしただ潜在的にのみ、資本そのものの廃棄を含んでいるのである。銀行制度によって、資本の分配は、私的資本家や高利貸の手から、一つの特殊な業務として、社会的な機能として、取り上げられている。しかし、これによって同時に銀行と信用とは、資本主義的生産をそれ自身の制限を越えて進行させる最も強力な手段となり、また恐慌や思惑（詐欺的幻惑）の最も有効な媒介物の一つとなるのである。」（P782-783）

資本主義的生産様式の産物としての信用制度を結合労働の生産様式の社会への槓杆に

「最後に、資本主義的生産様式から結合労働の生産様式への移行にさいして信用制度が強力な槓杆として役だつであろうことは、少しも疑う余地はない。とはいえ、それは、ただ、生産様式そのものの他の大きな有機的な諸変革との関連のなかで一つの要素として役だつだけである。これに反して、社会主義的な意味での信用・銀行制度の奇跡的な力についてのもろもろの幻想は、資本主義的生産様式とその諸形態の一つとしての信用制度とについての完全な無知から生まれるにである。生産手段が資本に転化しなくなれば（このことのうちには私的土地所有の廃止も含まれている）、信用そのものにはもはやなんの意味もないのであって、これはサン・シモン主義者たちでさえも見抜いていたことである。他方、資本主義的生産様式が存続するかぎり、利子生み資本はその諸形態の一つとして存続するのであって、実際にこの生産様式も信用制度の基礎をなしているのである。」（P783）

以上が「第三六章」の概要ですが、この章の中で、マルクスがサン・シモンについて、オーエンと対比して、厳しい評価をしていることに関して、サン・シモンに対するマルクスのその後の評価を踏まえ、エンゲルスは文中の「注」で、マルクスへの優しいまなざしをもって、訂正しています。このことを不破さんは『前衛』2014年1月号で「相当なサン・シモンびいきでしたね。」（P89）とエンゲルスを嘲笑しています。

また、エンゲルスが不正確な表現を用いた場合（『国家と革命』国民文庫P98参照）でも、レーニンはそれを責めることなどしていませんが、不破さんは、議会を通じての「革命」などできない情勢、歴史的な時期に、そのことを明確にしたレーニンの文章の一部を抜き出してレーニンを全否定し、悪口を言います。

マルクスのサン・シモンの評価へのエンゲルスの優しいまなざし、レーニンのエンゲルスへの優しいまなざし、これらと不破さんのマルクス・エンゲルス・レーニンへの接し方とは、大きく異なります。どうして、不破さんは、同志的なあたたかい眼差しでエンゲル

スやレーニンを見ることができないんでしょうか。

**現代の私たちが留意すべき点**

信用制度のもとでの企業家支援と高利貸し

「財産はないが精力も堅実さも能力も事業知識もある一人の男がこのようにして資本家に転化することができるという」、「経済学的弁護論者たちによって非常に賛嘆される」、信用制度のもとでの起業家支援策や中小企業支援策は、資本による「支配の基礎を拡大して、それが社会の下層からの新鮮な力によって絶えず補充されることを可能に」し、「被支配階級の最もすぐれた人物を自分のなかに取り入れ」、その支配をますます強固にするだけでなく、国民に資本主義の幻想を植えつけるうえでも非常に重要です。私たちはそのことをしっかり見ておく必要があります。

同時に、資本主義的生産様式の意味では借入れができないような諸個人や諸階級にたいしては、利子生み資本は、資本主義的生産様式以前の時代の産物である「高利資本」の形態を保持しているという指摘は、いかにも資本主義らしいご都合主義を現しています。

資本主義的生産様式の産物としての信用制度を結合労働の生産様式の社会への槓杆に

信用制度は、その貸し手もその充用者もこの資本の所有者でもなければ生産者でもなくすることによって、資本の私的性格を廃棄し、潜在的に、資本そのものの廃棄を含んだものとし、銀行制度は、資本の分配を一つの特殊な業務として、社会的な機能とし、資本主義的生産様式をその可能なかぎりの最高最終の形態まで発展させる推進力となるとともに、銀行と信用とは、資本主義的生産をそれ自身の制限を越えて進行させる最も強力な手段となり、また恐慌や思惑(詐欺的幻惑)の最も有効な媒介物の一つとなります。

このように、第五篇の最後の「章」である第三六章は、大谷氏の言う「信用制度概説」である「第二七章」で述べられている、信用制度が社会的生産諸力と社会的生産の発展という「新たな社会の形成要素」の発展と「古い生産様式の解体の諸要素を促進する」ということということを、再確認しています。私たちは、この意味を、労働者階級・国民に分かりやすくしっかりと伝えなければなりません。労働者階級・国民をバカにして、「賃金が上がれば経済が良くなる」としか言わず、労働者階級・国民を眠り込ませる人たちは、科学的社会主義の思想とは無縁の人たちです。だから、そのような人たちは、ここで、いま私が述べているようなことなど一言も言おうとはしません。

「利子生み資本」の資本主義以前を一瞥してきた「第三六章」は、最後に、利子生み資本の未来を展望します。資本主義的生産様式から結合労働の生産様式の社会へ移行が行なわれるということは、信用制度の基礎をなす生産様式がなくなり、生産手段が資本に転化しなくなり貨幣が利子を生まなくなるということです。貨幣が利子を生むことを前提とする「信用制度」はもはやなんの意味もなくなります。つまり、第二八章で述べられている資本主義的生産様式のもとで貨幣がもっている、①流通手段、②価値表現、③資本の循環形態の一局面である貨幣資本、④利子生み資本としての貨幣資本という四つの機能から③と④の機能がなくなるということです。

なお、関連してマルクスは、「資本主義のではなく共産主義の社会(この場合の「共産主義の社会」とはいわゆる「社会主義社会」のこと――青山)を考えてみれば、まず第一に貨幣資本は全然なくなり、したがって貨幣資本によってはいってくる取引の仮装もなくなる。」(大月版『資本論』③ P385)と言い「社会的生産では貨幣資本はなくなる。社会は

労働力や生産手段をいろいろな事業部門に分配する。生産者たちは、たとえば指図証を受け取って、それと引き換えに、社会の消費用在庫のなかから自分たちの労働時間に相当する量を引き出すことになるかもしれない。この指図証は貨幣ではない。それは流通しないのである。」(大月版② P437-8)と述べています。

この点について、私は、「資本主義のではなく共産主義の社会を考えてみれば、まず第一に貨幣資本は全然なくなり、したがって貨幣資本によってはいってくる取引の仮装もなくなる」という社会において、それがまだ「社会主義社会」であり人間の労働に依拠した社会である以上、人間の労働に根拠をおく「価値表現」はなくならないし、その価値に根拠をおく「流通手段」も必要だと考えています。

第五篇の最後の「章」の最後の文章で、マルクスとエンゲルスが示した「結合労働の生産様式」の社会とは、「貨幣資本」のなくなった搾取のない社会の姿でした。私たちはこの「貨幣資本」の行動をしっかりつかんで余すところなく暴露しなければなりません。

これらから、「第五篇」学習の意義は、信用制度が社会的生産諸力と社会的生産の発展という「新たな社会の形成要素」の発展と「古い生産様式の解体の諸要素を促進する」ということの意味をしっかりつかむとともに、「貨幣資本」の行動をしっかりつかんで余すところなく暴露することの必要性を理解することあると思います。

**おまけ**

なお、『経済』2000年2月号で不破さんは、「最後に、資本主義的生産様式から結合労働の生産様式への移行にさいして信用制度が強力な槓杆として役だつであろうことは、少しも疑う余地はない。とはいえ、それは、ただ、生産様式そのものの他の大きな有機的な諸変革との関連のなかで一つの要素として役だつだけである。」(P783)という文章の中の「とはいえ、それは、ただ、生産様式そのものの他の大きな有機的な諸変革との関連のなかで一つの要素として役だつだけである」という、しごく当然な文から、レーニンにとんでもない攻撃をくわえ、自からの認識能力のなさを暴露しています。詳しくは、是非、ホームページ 4-12「☆不破哲三氏によるレーニンの「記帳と統制」の概念の歪曲」をお読み下さい。